

**J**nclusive  
ournal  
of **E**ducation

Printed 2016.0830

ISSN 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



*August 2016*  
VOL. **1**

ORIGINAL ARTICLE

# 特別支援学校における常設型カフェプログラムの教育的効果

—特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) による評価—

## Effects of Weekday Café Program in Special Needs School; Using by Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)

知念 良美<sup>1)</sup> (Yoshimi CHINEN), 田中 敦士<sup>2)</sup> (Atsushi TANAKA),  
今村 清輝<sup>3)</sup> (Kiyoteru, IMAMURA), 城間 政次<sup>3)</sup> (Masatsugu SHIROMA)

- 1) 沖縄県立南風原高等学校  
(Okinawa Prefectural Haebaru High School)
- 2) 琉球大学教育学部  
(Faculty of Education, University of the Ryukyus)
- 3) 沖縄県立美咲特別支援学校はなさき分校  
(Hanasaki Branch of Okinawa Prefectural Misaki Special Needs School)

<Key-words>

特別支援学校, 知的障害, 常設型カフェ, 特別支援教育成果評価尺度  
(special needs school, intellectual disability, weekday café program, SNEAT)

knjoyshm@open.ed.jp (知念 良美)

Journal of Inclusive Education, 2016, 1:11-18. © 2016 Asian Society of Human Services

### ABSTRACT

沖縄県立美咲特別支援学校はなさき分校では、沖縄県内で初めて知的障害のある生徒による常設型カフェの取り組みを 2015 年度から試行的に始めた。本研究ではその実践効果について、自立活動の内容と QOL の観点も含めた評価尺度である特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) を用いて効果検討し、常設型カフェの取り組みの有効性を考察することを目的とした。2015 年 6 月から 9 月にかけて、作業学習の授業において常設型カフェの取り組みを行い、4 回の評価を行った。その結果、総合得点において、1 回目から 4 回目と回数を重ねるごとに得点が上昇し、主効果に有意傾向が認められた。体の健康領域得点では、主効果に有意な差が認められ、多重比較の結果、1 回目と 4 回目間に有意差が認められた。常設型カフェの取り組みは継続的に行うことで、知的障害のある生徒に一定程度効果的であることが示唆された。

Received  
2016 / 7 / 15

Revised  
/ /

Accepted  
2016 / 8 / 11

Published  
2016 / 8 / 30

## I. 問題と目的

児童生徒が将来、自立した生活を送るためには、人との関わりの中で自分の気持ちや考え、出来事やそこから感じたことなどを周りの人に伝え、コミュニケーションをとる力が必要となる。さらに、その力は現在の児童生徒の生活も豊かにし、その積み重ねが将来の社会的自立へとつながっていく（福岡市教育センター，2013）。コミュニケーション能力の育成は重要な課題である。

特別支援学校学習指導要領には、自立活動の内容が6区分、26項目で示されている。6区分のひとつである「コミュニケーション」では、場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるようにする観点から内容を示しており、項目の1つに「(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること」が設定されている。この項目は、場や相手の状況に応じて、主体的なコミュニケーションを展開できるようにすることを意味している。具体的な指導内容として、交わされた内容の確認を行えるようになることや、相手や状況に応じたコミュニケーションツールの活用を身につけることができるようになることがあり、そのために実際の場面を活用したり、場を再現したりするなどして、指導していくことなどが紹介されている（文部科学省，2009）。

「(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること」の実践的な例として、教室内で生徒や教員と共に、ロールプレイング、フィードバック等の、ソーシャル・スキル・トレーニングの手法を活用することや、アサーション・トレーニングの「アサーティブ」「攻撃的」「非主張的」の伝え方を取り入れた方法等が報告されている（宮原，2011）。しかし、それらは校内だけでの授業に留まってしまい、上述した具体的な指導内容に挙げられている「実際の場面を活用したり、場を再現したりするなどして、指導していくこと」において、「場を再現」するのみになってしまう。「場の再現」のみの授業では、指導する教員の想定内の範囲でのマニュアル的な対応となり、「実際の場面を活用」とは言えない。より、実践的なコミュニケーション能力の育成を図るためには、外部との関わりの中で、状況に応じたコミュニケーションを図れるような実践の場が求められる。

そこで、近年、知的障害特別支援学校においては、校内に常設型カフェを設け、実践的な学習を行う学校が全国的に増えてきている。比較的軽度の知的障害がある生徒を対象としている高等特別支援学校では、就労目的で行っている学校が多い。一方、障害の程度が軽度から重度まで様々である学校においては、コミュニケーション能力や対人スキルの向上を目的としている学校もあり、常設型カフェの取り組みの目的は学校の実態によって異なっている。

現在、沖縄県内の知的障害特別支援学校において、常設型カフェの取り組みを行っている学校が1校ある。美咲特別支援学校はなさき分校は、平成26年4月に開校した新設校であり、小学部・中学部・高等部が設置されている。児童生徒の知的障害の程度は軽度から重度まで様々で、重複障害のある児童生徒も在籍している。また、開校に向けて、①本人、保護者、地域のニーズを踏まえる、②小規模ならではの教育活動を行う、③施設・設備の違いを生かすなど、魅力ある学校の取り組みを行うために話し合ってきた。そこで美咲特別支援学校はなさき分校が、教育課程の軸に置いた目標が「生活する力、人（社会）と関わる力、コミュニケーション力の向上」である。そのための取り組みとして、常設型カフェの取り組みを作業学習の授業で行うこととなった。

常設型カフェでは、中学部・高等部の作業学習の5つの班（家庭、窯業、木工、手工芸、

園芸・美化) が各々の役割を活かし、「カフェ」というツールで連携し、物・人・知恵を集結して活動している。役割の違う班との連携を行うときのコミュニケーションや接客を行う際の場に応じた対応などを学習しており、常設型カフェの取り組みによって、「生活する力、人(社会)と関わる力、コミュニケーション力」が向上するであろうと推測される。しかし、全国の特別支援学校における常設型カフェの取り組みの研究で、学術雑誌等に掲載されている論文は実践報告のみで、運営面に関する紹介が多く、教育的効果をきちんと記述、検討しているものはみとめられなかった。教育的効果を客観的に科学的な尺度を用いて検討している論文もまったく見当たらなかった。

本研究では美咲特別支援学校はなさき分校の常設型カフェの取り組みを、自立活動の内容と QOL の観点も含めた評価尺度である「特別支援教育成果評価尺度 (Special Needs Education Assessment Tool ; SNEAT)」を用いて効果検討し、常設型カフェの取り組みの有効性を考察することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

沖縄県立美咲特別支援学校はなさき分校高等部に在籍している生徒 13 名を対象とし、勤務する教員 12 名を特別支援教育成果評価尺度 (以下、SNEAT とする) の評価者とした。

### 2. 手続き

平成 27 年 6 月から 9 月にかけて、作業学習の授業においてカフェプレオープン 1 回目終了後に第 1 回目の評価を、カフェグラウンドオープン 2 回目終了後に、第 2 回目の評価を、カフェグラウンドオープン 3 回目終了後に第 3 回目の評価を、カフェグラウンドオープン 4 回目終了後に、第 4 回目の評価を実施した (表 1)。なお、個人が特定されないよう無記名式の評価とした。

表 1 授業計画 (SNEAT 実施日)

| 月 日      | 授業内容          | SNEAT 評価 |
|----------|---------------|----------|
| 6月26日(金) | カフェプレオープン①    | 1回目      |
| 6月29日(月) | カフェプレオープン②    |          |
| 6月30日(火) | カフェグラウンドオープン① |          |
| 7月3日(金)  | カフェプレオープン③    |          |
| 7月6日(月)  | カフェプレオープン④    |          |
| 7月7日(火)  | カフェグラウンドオープン② | 2回目      |
| 9月14日(月) | カフェプレオープン⑤    |          |
| 9月15日(火) | カフェグラウンドオープン③ | 3回目      |
| 9月25日(金) | カフェプレオープン⑥    |          |
| 9月28日(月) | カフェプレオープン⑦    |          |
| 9月29日(火) | カフェグラウンドオープン④ | 4回目      |

SNEATは1回目5例、2回目3例、3回目10例、4回目10例の有効回答が得られた。評価者は、生徒をよく知る教員のうち、カフェに関わる授業担当者・観察者に限定した。

### 3. 常設型カフェ「Flowers Bloom」の概要

(1) ねらい

生活する力、人（社会）と関わる力、コミュニケーション力を高める。

(2) 活動内容

接客や運搬、調理等カフェ運営に関わる活動とする。

(3) カフェオープンまでの流れ

9:40・・・各持場でスタッフ集合、役割分担の確認

9:45～10:15・・・諸準備（接客用語確認、焼き菓子の下準備等）

10:15・・・カフェと調理班の連絡確認

10:30～11:30・・・カフェオープン

(4) 役割分担

接客係・・・高等部生徒4名、教員2名

運搬係・・・高等部生徒4名、教員1名

調理・ドリンク係・・・高等部生徒5名、教員2名

※カフェで使用されているテーブルやエプロン、メニュー等は中学部、高等部の各作業班が作製している。

(5) 場所

美咲特別支援学校はなさき分校 1F 図書室（図1）

※保健所の指導により、調理は3F家庭科室で行い、提供物は専用の運搬ワゴンで1F図書室へ運搬している。

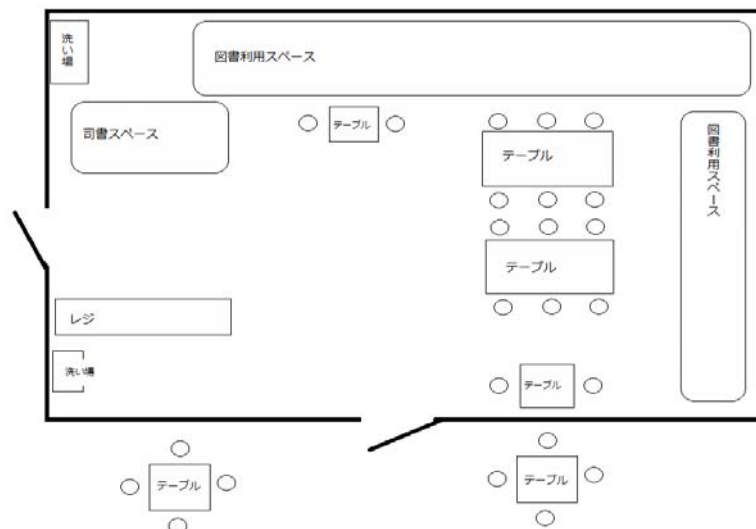


図1 図書室でのカフェの場の設定

#### 4. 評価項目

SNEATは、(韓・小原・上月, 2014)により開発され、自立活動の内容にQOLの概念を加え、児童生徒のQOL向上の視点から教育成果を評価できる尺度である。フェイスシート(年齢・性別・通算教職経験年数・特別支援学校教員免許保有の有無など)と、体の健康、心の健康、社会生活機能の3領域11項目から構成されている(表2)。これら11項目を児童生徒の教育達成度に合わせ授業担当教員が1~5で段階的に評価する。SNEATが評価する授業の対象児童生徒は、1.なんらかの意志表示ができるレベルの児童生徒であること、2.姿勢と運動・動作が一時的でも改善する可能性のある児童生徒であること、の2条件を満たせば障害種を問わず使用することができる。

採点方法は、教育現場で使いやすいよう合計100点に設定されている。各領域の合計点数は、「体の健康」がQ1のみ5=5点、4=4点、3=3点、2=2点、1=1点とし、Q2~Q4は5=10点、4=8点、3=6点、2=4点、1=2点とし、領域合計35点となっている。「心の健康」は、Q5のみ5=5点、4=4点、3=3点、2=2点、1=1点とし、Q9~Q11は、5=10点、4=8点、3=6点、2=4点、1=2点となっている。各領域は、授業目標の達成難易度の低い項目から順に並べている。合計100点にするため、「体の健康」と「心の健康」で最も達成度の低いQ1とQ5は重み付けを低くしている。SNEATは沖縄県内10特別支援学校93事例の自立活動での繰り返しデータから、Cronbachの $\alpha$ 係数0.90、級数内相関係数0.89と高い信頼性が得られ、構成概念妥当性は縦断的な構造方程式モデリングを扱う潜在成長曲線モデルにより高い適合度を得られている(Kohara, Han, Kwon, et.al., 2015)。

表2 SNEATの構成

| 特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| <b>①体の健康</b>         |                                      |
| Q1                   | 授業で行った活動は、児童生徒の体の状態に適したものでしたか        |
| Q2                   | 児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか               |
| Q3                   | 児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか              |
| Q4                   | 児童生徒は病気(障害)の状態の理解が深まりましたか            |
| <b>②心の健康</b>         |                                      |
| Q5                   | 児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか               |
| Q6                   | 児童生徒は集中して学習活動に取り組みました                |
| Q7                   | 児童生徒の学習上の意欲は高まりましたか                  |
| Q8                   | 児童生徒は、授業中起こりうる場所や場面の变化を理解し対応しましたか    |
| <b>③社会生活機能</b>       |                                      |
| Q9                   | 児童生徒は、授業中に他者とのかかわりを持ちましたか            |
| Q10                  | 児童生徒は、授業中に適切なコミュニケーションの手段を選択し表現しましたか |
| Q11                  | 児童生徒は、授業のルールを理解し行動調整をしながら参加しましたか     |

(韓・小原・上月, 2014)

### Ⅲ. 結果

#### 1. 基本属性

男女比は男性 33.3%、女性 58.3%、無回答 8.3%であった。回答者の特別支援学校における教職経験総年数の平均年数及び標準偏差は 15.2 年±8.5 年である。特別支援学校免許保有については「有り」が 7 名 (58.3%)、「無し」が 4 名 (33.3%)、「無回答」が 1 名 (8.3%)であった。

#### 2. SNEAT 総合得点と各領域得点の推移の推移

総合得点と体の健康領域においては、1 回目から 4 回目と回数を重ねるごとに得点が上昇している。

心の健康領域と社会生活機能領域では 1 回目から 2 回目にかけて得点が下がり、3 回目、4 回目と得点が上昇している。(図 2)。

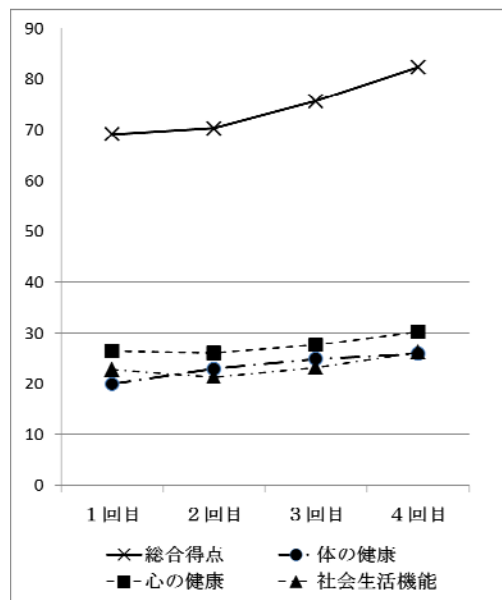


図 2 総合得点と各領域得点の推移

分散分析の結果、総合得点においては回数を重ねるごとに得点が上昇し、主効果に有意傾向が認められた。

Tukey 法による多重比較の結果、1 回目より 4 回目間の方が有意に高くなる傾向が見られた。体の健康領域得点においても回数を重ねるごとに得点が上昇し、主効果に有意な差が認められた。Tukey 法による多重比較の結果、1 回目と 4 回目間に有意差が見られた。社会生活機能領域得点においては、1 回目から 2 回目にかけて得点が下がり、3 回目、4 回目と得点が上昇し、主効果に有意な傾向が認められた。心の健康領域得点では、主効果に有意差は認められなかった (表 3)。

表3 分散分析結果

|        | 1回目 n=(5)   | 2回目 n=(3)   | 3回目 n=(10) | 4回目 n=(10) | P値     | 有意判定 |
|--------|-------------|-------------|------------|------------|--------|------|
| 総合点    | 69.20±10.73 | 70.33±11.93 | 75.70±9.03 | 82.30±8.49 | 0.0671 | †    |
| 体の健康   | 20.00±3.94  | 23.00±2.65  | 24.90±3.84 | 25.90±3.57 | 0.0447 | *    |
| 心の健康   | 26.40±5.99  | 26.00±7.00  | 27.60±4.95 | 30.20±3.43 | 0.3899 | n.s. |
| 社会生活機能 | 22.80±3.35  | 21.33±2.31  | 23.20±3.43 | 26.20±3.33 | 0.0789 | †    |

#### IV. 考察

本研究では、特別支援学校における常設型カフェの取り組みをSNEATにより教育的評価を行い、効果検討することを目的とした。本結果より、常設型カフェの取り組みは継続的に行うことで、特別な支援を必要とする生徒に一定程度効果的であることが示唆された。

体の健康領域では、主効果に有意な差が認められ、Tukey法による多重比較の結果、1回目と4回目間に有意差が認められた。生徒達は毎朝、健康チェックカードを使用し、体調に関する自己管理を行い、体温や入浴、排便に関する内容に加え、爪などの身だしなみに関し、生徒自身及び保護者と共にチェックを行うことが習慣付けられていた。このことから、衛生面において特に日常的に意識づけられていたことが結果に反映されているのではないかと考えられる。また、毎回のカフェオープン前には、接客にあたってのビジネスマナーや立ち方に関する姿勢等を確認する場面があった。回数を重ねるごとに、一般のお客さんの前で自ら姿勢を整え、接客に関する立ち回り等の動作においてスムーズに行われている様子が見られた。以上のことから、体の健康領域においては経験を重ねていくことで、衛生面や姿勢・動作について自ら意識できるようになったのではないかと考えられる。

心の健康領域においては、主効果に有意差は見られなかったが、1回目と4回目の得点を比較すると、得点は上昇している。1回目のカフェプレオープンではモチベーションが高く、学習に対して意欲的な様子が見られた。しかし、2回目のカフェランドオープンでは、一般のお客さんに対する接客が初めてということもあり、緊張していたこと、自分の仕事内容が十分把握できていないこと等が原因で得点が下がったのではないかと考えられる。その後、3回目、4回目と回数を重ねることで自信を持ち、自分の仕事内容をしっかり把握し、集中して行動できるようになったことが結果に反映されていると考えられる。今後も中長期的な目線でSNEATの評価を続けていくことで、更に効果が出てくるのではないかと推測する。

社会生活機能領域では、1回目と4回目間に有意な傾向がみられた。接客係の生徒は、実際に一般のお客さんへ接客する経験を重ねることで、外部の人に対する言葉遣いを意識するようになった。また、調理係・ドリンク係・運搬係・接客係の生徒同士のコミュニケーションも徐々に増え、連携も取れた。教室での授業という限られた場面だけでなく、外部との関



わりの中で、状況に応じたコミュニケーションを図る教育実践の場として、常設型カフェはとて有効であると考えられる。

今後の特別支援教育分野の研究においては、エビデンスに基づいた学習の成果を公開することが強く求められてくると考えられる。今回の評価は、SNEAT の特徴ゆえ、生徒をよく知る教員に限定せざるを得なかったため、授業での教員配置上、統計学的に十分なデータ数を確保するのは不可能であった。SNEAT を用いた常設型カフェの効果検討としては、評価人数が少なく十分なものではないが、エビデンスに基づいた教育実践の普及に貢献する試みとはなったであろう。

## 文献

- 1) 福岡市教育センター(2013) 特別支援教育におけるコミュニケーション力の育成；個の実態を生かした目標設定と環境づくりの工夫を通して.
- 2) 宮原希(2011) 「知的障害特別支援学校高等部における コミュニケーション能力を育てる指導の工夫；学習したことを他の場面へ一般化する取り組みの開発. 平成 23 年度東京都教員研究生カリキュラム開発研究報告, (11)- ①～④.
- 3) 韓昌完・小原愛子・上月正博(2014) 特別支援教育成果尺度(SNEAT)の開発. *Asian Journal of Human Services*, 7, 125-134.
- 4) 文部科学省(2009) 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編. 海文堂出版, 69-70.
- 5) Aiko Kohara, Changwan Han, Haejin Kwon, Masahiro Kohozuki(2015) Validity of the Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT), a Newly Developed Scale for Children with Disabilities. *The Tohoku journal of experimental medicine*, 237(3), 241-248.

## - Editorial Board -

|                  |                |                                   |
|------------------|----------------|-----------------------------------|
| Editor-in-Chief  | Atsushi TANAKA | University of the Ryukyus (Japan) |
| Executive Editor | Changwan HAN   | University of the Ryukyus (Japan) |

Aiko KOHARA  
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA  
National Institute of Vocational Rehabilitation  
(Japan)

Eonji KIM  
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON  
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI  
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI  
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI  
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI  
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE  
Kio University (Japan)

Kohei MORI  
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN  
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA  
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO  
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI  
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA  
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA  
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA  
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA  
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI  
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA  
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI  
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA  
Joetsu University of Education (Japan)

## Editorial Staff

|                        |                   |                                   |
|------------------------|-------------------|-----------------------------------|
| - Editorial Assistants | Mamiko OTA        | University of the Ryukyus (Japan) |
|                        | Sakurako YONEMIZU | Asian Society of Human Services   |

## Journal of Inclusive Education

**VOL.1 August 2016**

© 2016 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education  
VOL.1 August 2016  
*CONTENTS*

**ORIGINAL ARTICLES**

- The Measurement of Educational Assessment and Psychology, Physiology and Pathology for Children with Physical Disability, Health Impairment .....Haejin KWON, et al. 1
- Effects of Weekday Café Program in Special Needs School; Using by Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)..... Yoshimi CHINEN, et al. 11
- Redefinition and Construct of Diversity Education..... Changwan HAN, et al. 19
- Remembering the Past Autobiographical Memories and Imaging the Future in an Adult with Amnesic Syndrome; The Role of the Involuntary Memory .....Mikio HIRANO, et al. 28
- Study for Construction of the Individual Education Support Model: Based on IN-Child Record ..... Mamiko OTA, et al. 35
- The Influence of the Degree of Others/Self-understanding of the Social Interaction in Children with ASD ..... Toru SUZUKI, et al. 48
- Study on the Expectation of the Student Volunteers to Assist in the Leisure and Learning for Hospitalized Children ..... Sachiyo YAMASHITA, et al. 54
- The Verification of the Reliability of the SNEAT10; The Study of Screening Scale for Inclusive Needs Child .....Aiko KOHARA, et al. 67
- Social Psychological Study for Motivations of Supports for Developmental Disorders by Members in Workplaces .....Hiroataka KUWAKI, et al. 74
- Description of Disability in the Sub-textbook on Morals for Elementary School Students ..... Atsushi TANAKA, et al. 85
- The Discrepancy in Members' Participation Purpose in the Self-help Group of Person with Disabilities and His/Her Family that Continues for Many Years: A Case of the Group for Down's Syndrome ..... Takahito MASUDA, et al. 92
- Current Situations and Issues of the Education for Disability Understanding in Higher Education ..... Haejin KWON, et al. 104
- Performance Analysis of Diversity Management using the Balanced Scorecard: Case Study of Japanese Companies Employing Disabled and the Elderly .....Moonjung KIM 114

**REVIEW ARTICLES**

- Special Needs Education in School Education Act and Services and Supports for Persons with Disabilities Act ..... Ryotaro SAITO 124
- Executive Function and Brain Pathology in People with Intellectual and Developmental Disabilities ..... Yoshifumi IKEDA 132
- Research Trends on Educational Support and Psychological Characteristics of the Children with Physical Disabilities ..... Kohei MORI 140
- Special Needs Education in The Elementary School Government Guidelines for Teaching and Nursery Childcare Indicator..... Ryotaro SAITO 146
- Basic Study about Development of the Education for Disability Understanding Index; Based on the Inclusive Education.....Haena KIM, et al. 155
- Current Situation and Issues Related to Organization of the Education Curriculum and Devising of Educational Treatment of Children with Health Impairments..... Kohei MORI 164

**PRACTICE REPORT**

- A Report of the Project of Establishment of Educational Security Center for the Long-term Hospitalized Children in Ehime Prefecture..... Kosuke NAKANO, et al. 170

Published by  
Asian Society of Human Services  
Okinawa, Japan